

雲岡から萬安へ

— 蒙疆の旅行手帳より —

長 廣 敏 雄

十月十五日（昭和十六年）に私は雲岡から大同へ出た。八月十六日に雲岡の宿舎へはいつてから、六十日振りである。

晋北政廳のトラック二臺は翌十六日に雲岡から鹽田義秋、北野正男の兩君と材木六〇〇本（この材木は調査用の足場になつたもの）とをのせて、大同に入つた。その夜は佐々木氏に案内されて、江戸前の壽司を食ひにゆき、東京の日暮里の兄イと話した。佐々木氏とも暫くの御別れである。

十七日朝八時三十分には大同を立つて、北野君と二人で萬安に降りる。鹽田君は一まづ北京の兄さんのうちへ急ぐ。萬安縣參事上田氏は意外に若い書生ツぽである。全身に元氣がみなぎる少壯官吏だ。その日は風の強い寒い日であつたが。縣公署でお邪魔になつてもし

かたがないので、上田氏と一緒に發掘中の古墳現場までトラックで行つた。三基の大きな古墳はボツカリ口をあけてゐるが、まだ何の收穫もないといふ。それだけでなく、小林君は失望してゐる。盜掘だらうといふ、石器時代の堅穴が、先着の岡崎卯一君擔當の古墳の中央から出てゐる。小野勝年君擔當のところは、土質が柔いので、いくど掘つても封土が崩落するらしい。九月二十五日から掘りはじめたのだから、もう三週間になつてゐる。もう出土品があつてもいいのではないか。或はもつと深いのか。やはり盜掘なのか。

夕方宿舎にあてゝゐる北沙城村の一番奥まつた裕かさうな農家の房子に入る。院子に面した西房の一室で新築早々だが、非常に狭くてどうにもならない。蒙古政府からは小林知生君と稻生君、小林君のコック、北京からは留學中の小野勝年君、吾々石佛寺調査團からは先着の水野清一君、羽館易君、岡崎卯一君、それに今日は北野君と私とが應援にきたのだ。

たゞ雲岡よりも一同の氣分が明い。小林君、稻生君、小野君三人が別の氣分を作つてゐるからであらう。

この狭い部屋には炕がない。寒い部屋で水野、小野

君と枕をならべて寝た。寢返りを打つと兩君のどこかにぶつかる。雲岡で慣れてはゐるが窮屈なことは變らない。雲岡ではきたないといつても、もう四年目の調査生活でかなり整頓した調査員室だつた。こゝではタオルがみるみる黒く染つていつたのでも、如何に煤けてゐるかと分る。

翌十八日の午前は小野君の古墳を手傳つた。小野君は久しぶりに上田氏の官舎まで風呂に行つたので不在だつたからである。

萬安古墳が色めいたのは十九日の午後からであつた。水野、北野、羽館、私の四人は漢の土城址を探りに、古墳のあるところとは反對方向へ漫步してゐた。土城址には亭々たる巨樹が並んでゐて、晩秋の風に枝をならしてゐた。ぽかぽかと暖い日で、私は漢の瓦や土器の散布状態に目を注いでゐた。

發掘監督に行つてゐた小林君がだしぬけにやつてきて、博山爐が出土したといふ。吉報にしては浮かぬ顔である。とにかく盗掘古墳ではなかつたのだ。皆で現場へかけつけたのは、もう四時を廻つてゐた。

井戸のやうに深い古墳の棚内に、博山爐の尖つた頭

がけが、青く見えてゐた。土工たちに知らずまいとする小林君の計畫のうちに、私が遺物の取り上げ役となつた。博山爐には鳥形が脚に鑄出され、盤には龜が踞つた形をかたどつてあつた。支柱は少し曲つてゐたが折れてゐない。北壁と天井の木材に壓されてゐたが、木材は自然に腐りつゝ落下したらしい。これが遺物に幸運を齎したのである。鼎も出土した。蓋があげてあつた。その傍にまた薄い銅器の平たい口縁部がみえ、盤らしいと思つた。

私たちは多少興奮して銅器をとりあげた。博山爐の平たい皿の部分は、床のしめつた泥土に吸ひついてゐた。二千年の住居をはなれたいといつたやうな執着を、私はもちあげる兩手に感じた。

その晩はさゝやかな祝盃をあげ、食後のトランプ戦にも活氣があつた。噂は小さな村全體にすぐに響いた。曲り路の多い村の小路々に、ひとびとは吾々を注意してみるし、たゞすみ、振り向くのであつた。

小林君は二十日に張家口へ歸つた。報告するためである。嬉しくて黙してゐられないといふところだ。

北沙城の村には暖い日がつゞいた。私と稻生君とは

小林君の留守をまもつて、殊勲の第六號墳の發掘を擴張するプランを立てた。古墳は東壁が出てをり、南北壁も大體の見當をつけたので、西壁を發見する必要があつた。土工を二十人から二十四・五人使つて、進行をはかつた。雲岡では十月初旬に結氷したから、ここにも、いつ結氷がくるか分らない。ぐづぐづしてはゐられないのである。私は義兄の計報に接してゐたので最初二十五日頃塘沽を出發したいと考へたが、これは延期することに決心した。

土工の監督はじやん／＼やつた。しかしむろん、さう簡單に能率のあがるわけはなかつた。

或る日、私は一八・九歳の美しい一人の土工を見出した。その男は青年といふには少年の香ひがした。日焼けしてゐるが、鼻立ちが秀で、澄んだ目であつた。女では得られない美しさがあつた。土工をするからには農家の出だらうが、まだ子供っぽい鍬の使ひ方であつた。重い土を四・五尺の高さにほり上げるのに腰の運動でたすけないで、腕と肩だけで扱つてゐた。そのため肩に特種な女性的なひねりが表はれて、少年ら

しい技の未熟と農民らしくない羞恥とが示された。

また別の或る日、私はこの階段狀の發掘現場をオーケストラの姿と空想した。一番底にはわづかに五人しかゐないが、その五人のすくひ上げる土を古墳の外へ運ぶのに、一段々と上へほり上げる。底の土工が働けば上の土工も働き、底が休めば上も休むのであつた。漢人の農民として三千年の愛器である一本の鍬、それは單調な動きであつた。しかし私はすぐに苦笑した。オーケストラが蒙疆の自然の大きさにとつて、何を表現しうるであらうか。なまやさしい感情の起伏を示す藝術手段では、鐵のやうに堅く厚い、そして年古りたる天地は共鳴しないのだ。

私の、雲岡の調査生活にも、たえず腦裡に音楽が去來した。蒙疆の天地に抵抗できるやうな音楽こそがもつとも偉大なものなのだ。私はなぜか、しばしばベートーヴェンの「第五シムフォニイの終章」のテーマを想ひ起した。それは立派だが、茶褐色の岩山と枯野に圍まれた生活にそれは適しいと思へなかつた。まづ、それはとても人間臭いと感じた。

(これをかいてゐる北京の都ホテルでは、裏隣のカフェから

俗惡なレコードのリズムが流れてきてゐる。

小野勝年君の存在は北沙城村發掘生活に尊い明さをあたへた。彼はなにももの突きとめない第七號墳で執拗に調査をつづけた。愛すべき素朴さ、粘りづよさその内にきらめく鋭さを、吾々は貴重なものとした。

水野君はあちこちと地圖の測量に専念してゐた。岡崎君は竅穴址を黙々と追つてゐた。

二十一日であつたらうか。朝土工の監督をしてゐると、東壁と北壁との隅あたりの天井板の落ち込みが五寸角ほど一人の土工の鍬に掘りとられて、その土工は熱心に私にその個所を指し示した。私は最初は彼の意味するところが分らなかつた。しかし、直ぐに私はその木片が除かれた下に銅器の曲面が薄暗く、暗綠色にみえるのを、覺つた。それは比較的高い位置だつたから、二三日前に博山爐及び鼎が出た位置から推定してゐた私の豫定よりは、大分高いところである。

この銅壺は大きい！ さう思ふと私はさすがに興奮しないではゐられなかつた。東壁をもう少し削らなければならぬ。銅壺にはふれないで、土の掘りおこし

がすゝめられた。

この日の收穫は、萬安調査の絶頂點を形づくつた。

一尺五寸の大銅鐘、大銅盤、銅洗、更に一群の埋葬用明器と思はれる小銅器——鼎、釭、扁壺、壺、甗、溫斗——が発見された。木槨の東壁に沿つて、これら一群の銅器がならんだ景色は壯觀であつた。一同からは朗かな歡聲があがつた。午後に小林君が張家口から歸つてきた。これほど大收穫があると思はなかつたから例によつて浮かぬ顔の小林君であつた。上田參事官が晉北政廳の佐々木氏ときた。快笑の噴發であつた。

銅器には銅洗の一部に鍍金の痕跡がごく僅かにみられたが、どれもこれも素文で無裝飾であつた。銅鐘の獸環が垂れないで、上に向けられてゐたことは、興味深い。小銅器群は埋葬用の「既製品」らしく、小型で可愛く、獸面も鏤もなかつた。甗のごときは、裏底がいま作つたかと思はれるほど眞新しく、綠鏽は繪具のやうにあざやかであつた。これらの小銅器群には、なかに水がはいつてゐて、もうほとんど夕暮れになつた薄暗い槨室の底で水をこぼしてみたら、手袋を通して水は冷かつた。大銅鐘内には水がなく乾いた土が充滿

してゐて、とても重い。小銅器に水がたまり大銅鐘には水がまつたぐいことから、一つの推定が生れた。あまり遠くない過去までこの古墳には高さ四・五寸ぐらゐの地下水がたまつてゐたのだらう。のちに分つたが、この古墳では二體の埋葬者の木棺が朱模様の黒漆塗だつたのを始め、室内に漆器が充滿してゐたやうである。それらは全部融けて床上の土になつてしまつたが、地下水のさしひきが繰返しされたのかも知れない。

とにかく大銅鐘の乾いた土を捨てないでは、これを運びだすことは出来ない。翌朝この捨てた泥のなかに十個に餘る蛇の頭骨が発見された。泥を出した鹽田君は蛇をいくつか捌んでゐたわけである。

この日の出土品を一行總出で、あるひは捧げもち、あるひは箱にのせて運んで行つた。もうほとんど暮れはてた道には、村人の好奇にみちた無數の眼があつた。

私は北沙城村の景色の甘い自由さを忘れることが出来ない。遠くにきらきらと水面をかゞやかしてゐる洋

河の曲線、もうすつかり黄ばんだ楊樹の疎林を通して白銀色の鐵橋が横一文字にみえた。鐵橋の兩翼の赤煉瓦の見張り場。貨物列車が入り陽を横切つて、ごぼごぼ音を立て進んでゆく。水のたまつた村の小河。それを透してコロの風景畫にみるやうな霞んだ疎林。楊樹の滑稽な群生。高粱の刈入れをすませた、ひろびろとした田畑。私たちがその蔭で野糞をこゝろみる廢舎。單純な線の素材とモチーフとで、この鄙びてはゐるが面白い愛すべき景色が出来てゐるのだ。

あたゝかい日がつゞいた。雲岡生活の嚴肅さに比して、慣れ慣れしい村の生活であつた。蒙疆もこの氣分があるならば、住むことが樂だと思つた。さう、想ひ出されるのは野菜の貯藏のことだ。ひろい地面が深さ三米に縦十米横四米ぐらゐの長方形に掘られて（この場所から漢の土器がでるのであつたが）、そのなかに臺がならべられ、野菜は甲子年とか戊申年などゝ立派に書かれた大きな袋に入れて、埋められるのだつた。村人は陽氣な喧噪をきはめながら、その貯藏品をめぐつて働いてゐた。土城址の附近がその市をなしてゐるやうにみえた。

この土城には大きな見事な樹々が立ちならんでゐて、
 宿舍の院子からはこの樹々が風に梢をならしてゐるのが
 聞こえた。また、どこにあるのか廟からは山西梆子の
 板や胡弓と同じ音が夜の空気を渡つてきた。婚禮の
 音楽も聞こえた。それも同じことであつた。

かうした静けさは、いろいろの回想へと私を誘ふ。

雲岡では何海生（ホー・ゼン）の妹の婚禮が想ひ出される。何海生
 といふ調査班の使用勞役人（苦力といはなければかう
 言はねばなるまい）の一人は、なまいきな若者ではあ
 るが、もう何年も使つてゐた。雨のしとしと降る寒い
 暗鬱な日で、水野、羽館、戌亥、鈴木（シヅメ）の四君が雲岡を
 引きあげる日であつた。何海生は頭をきれいに散髪し
 剃刀をあてゝやつてきた。何海生の妹は美しい子であ
 つた。私は鹽田君と十六洞の仕事をしてゐたが婚禮の
 樂隊が近附いたので、花嫁をみに行つた。道は雨で泥
 々になり、雲岡鎮の城門は黒づんでゐる。武州川の南
 岸の斷崖から山道になつてゐるが、その道を四角な輿
 にのせられて、誰一人親族もつかないで遠ざかつてゆ
 く景色はきびしい痛さを味はされた。赤い輿はしばし

ば驟雨にたゞかれて、灰色の岩と土の臺地に立ちどま
 った。宿舍の窓からその景色を眺めて不思議な氣持を
 もつのであつた。

雲岡の自然は人間を打ち倒すものがあつた。人間を
 吸ひ盡すものであつた。岩壁は人を近付けない。人情
 を無視する。雲岡は巨大な靈跡のほかないのではない
 か。

十月十四日のこと、雲岡引上げの荷をすつかり纏め
 終り、北野、鹽田兩君と水泉村へ卵を買ひに行つた。
 水泉村といふのは、石窟の上に擴がる高原を越えて北
 へ四キロぐらゐ行つたところにある。その日の解放さ
 れた氣分は今でも忘れられない。樹の多い水泉村は雲
 岡鎮では味ふことの出来ない牧歌的なものをもつてゐ
 る。これは尊いことだ。途中の臺地からみられる風景
 は線の太い壯大なものだ。石佛寺の大佛蹟さへも、そ
 の偉大な荒々しい高原にとつては、たゞ一つの谷間と
 いふ變にすぎない。それに氣付いて私は愕然とした。
 私はしきりに音楽を作りたいと思ひ、バツハの大きさ
 が一番この自然に近いと思ふのであつた。切れること

のない長い長い線の音楽。人間の呼吸など比べものにならないほど、息のながいプレリュードのやうなりズム。堅い厚い石さへも共鳴しないわけにゆかない深い和聲。

鹽田君は支那の大きさに感嘆詞を投じてゐた。北野君は麻村の子供たちに焼付寫眞をやりて別れた。六時近く夕陽が山々の巒を木彫のやうに正確に浮きたてゝゐた。何を人間がこの自然になしうるか。何ものをとり出しうるか。自然は私たちを靜かな微笑でみてゐるやうであつた。

私はもう一度北沙城村のことに返らう。發掘はつゞけられた。濕つた灰色の土を竹篋ではぐと、きらきらした朱色の漆が目をひいた。残念なことには、このやうに溶けきつた漆は採集しがたいのであつた。夜の海から夜光虫を捕へるやうなものであつた。銅器群が出た次の日からは、もう出土品はとぼしかつた。銅製帶鉤（棒形、一部破損）に絹が附着し、竹のやうなものが底に附いて發見された。帶鉤の研究をまとめてゐた私にとつては、貧弱な品でも一つの資料が殖えたこと

は嬉しかつた。それは北壁の中間であつて、博山爐の西側である。その次の日には銀の覆輪のある漆奩中に星雲鏡のあるのを發見したが、これは酷くこはれてゐた。この日は雨が降り風が吹くので、午後は休止を餘儀なくさせられ、宿舍で奩の漆をガラス板にとることを皆でした。考古學の實習だといつて笑つた。刻々寒氣がきびしくなつた。

翌日は果して氷つた。一番寒い日であつた。西北風が吹きつり、洋河の水面から沙と水蒸氣との霧が流れた。山々は峻嚴な相貌に一變し、樹々は黄葉を落ちつくし、寒氣にふるへた。

第六號墳内の床面はすつかり氷つて、地表下五寸ほどは一夜で煉瓦のやうな堅さとなり、鍬もスコップも無駄であつた。それで農家の小供二三人に高粱の株を集めさせ、一日中焚火しながら土をゆるめた。

私は氣忙しく發掘を急いだ。棺の位置が未だに見當がつかず、それに月末までには北京に出たいと思つたからであつた。

翌日は風がやゝ風いだが、寒氣は衰へなかつた。ゴム靴の底はしびれるやうに冷い。あまり寒いので子供

に酒を買はせた。しかしアプサンのやうにとても強い酒で、喉を通らない。この日、羽館君が北壁西寄りに下肢骨二本を突きとめ、棺形は融けて分らないが、棺の位置は分つてきた。殊勲甲である。これで大體の木槨内の配置が分つた。

二十六日の朝、もう寒氣は幾分ゆるんだが、地面は氷つたまゝであつた。金井蒙古政府最高顧問一行四十名が、貨物列車に二等車一輛を臨時につけて、萬安古墳見物にきた。宿舎の中庭に銅器、土器をならべて、小林君、水野君、私の三人で説明した。村公所が休憩所となり、古墳の脇にテントが張られた。こんな日本人がこの村に來たことは、未曾有であらう。

その夜はいゝ月であつた。張家口に出た私は、薄暗い燈火管制下の驛構内で、夜中に出る北京行列車を待つてゐた。張家口では訪れたい人があつたが、果せなかつた。八月行き掛けに同車した龍烟鐵鑛技師長丁氏

一家であつた。大陸で生れて靖國神社を知らない子供さんたちを、内地まで連れて行かれ、張家口へ歸る路であつた。その可愛い子供さんたちに別れの挨拶が交はしたかつたのである。

張家口では山西梆子を聞きたいと思つたがこれも果せなかつた。メロディがつまらなくつて、リズムが面白いのは支那芝居の音樂の一特色で、山西梆子はそのいゝ例であつた。

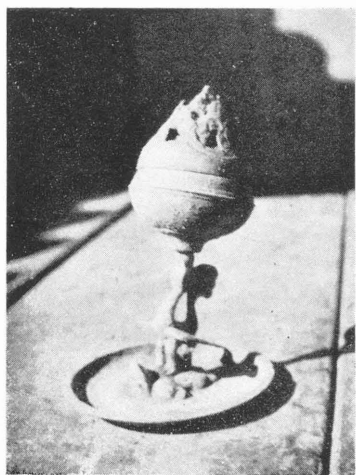
張家口の驛のプラットフォームには月光が流れ、暗いなかで、人々の煙草の煙だけが白く動いた。一人になつて、枯れてゐた感情がしづかに和み湧出するやうだ。萬安古墳の封土のしめつた柔い感觸、また氷つた痛い感觸などを、久し振りではいた革靴の底に想ひ出しながら、さう感するのであつた。

(昭和一九、一〇、三〇北京 都ホテルにて)

圖版 1



萬安縣古墳の發掘



博山爐



銅器群の出土

(長廣敏雄「雲岡より萬安へ」參照)